「法政大学58年館」における「設計変更」の意味

建築家・大江 宏の言説に関する方法論的研究

MEANING OF "DESIGN-ALTERATION" IN "58'S BUILDING OF HOSEI UNIVERSITY"

A study of the way about discourses by Hiroshi Ohe architect

崔 康 勲*

Kang Hoon CHOI

Buildings of Hosei University designed by professor Hiroshi OHE architect are known as most important works of university campus after World War Secound. They are constructed according to total master plan during five years from 1953 to 1958. After "55's Building", he had "design-alteration" for 58's Building". In this time and at a foreign land, he had imaged a university and had recognised that university is a community and coopration. We surmise that he had been thinking for idea and sketch of "university", follwing production management for "Japanes Pavillon in Sao Pauro" designed by Sutemi HORIGUCHI architect.

Keywords : Hiroshi OHE architect, Hosei university 58's building, Monumentality, Community, Design-alteration, Inner-dynamism of the ideal-formation

建築家・大江宏、法政大学58年館、モニュメンタリティ、コミュニティ、設計変更、思想形成の内面的力動性

1. はじめに

1-1. 本稿の主題

建築家の誕生には、建築家をして建築家たらしめる何か「内面的な事態」との遭遇を認めることができる。それは生涯をおおって師と呼ぶ人物との出会いであったり、旅で出会う建築体験（風景、空間）であるかも知れない。そうした建築体験の広がり、衝撃の深みは建築家の全人格的なものとして身体に記憶され、いずれの日にか一枚のスケッチとして描かれるであろう。そうでなかったとすれば、師との出会い、旅とは一体何なのだろうか。

ましてや、一人の建築家として、自らの存在証明である様式創造へと至る道程には、実存の人としての自己が、師との出会いや旅の体験、あるいは建築家以前ともいべき全身体的感覚において生じた事態への、自覚的・自知的に観入する瞬間があったはずである。

建築的行為とは、そうした全身体的感覚において生じた体験を、設計（構想とスケッチ）という制作行為をとおして、自覚へと、自知へともたらすことである¹⁾。時に、この自覚、自知が、「設計変更」というかたちで現実となることもしばしば経験しうるところである。

建築家・大江宏における「法政大学58年館」の着手に当たっての「設計変更」の意味を問うことを通じて、建築家・大江宏の誕生へ

と連なる「内面的な事態」とはいかなるものであったかを明らかにしたい。そのためには、まずは「法政大学58年館」の建築の実際がいかなる主題を実現したものとして存在しているのか、その主題は、建築家・大江宏であるとともに、一人の大学人でもあった実存の人・大江宏にとって、大学の建築を導く理念とは何か、そもそも大学とは何かを問うことともなるであろう²⁾。

1-2. 本稿の対象とする時期

本稿において対象とする「法政大学58年館」の着工は1956年11月であり、竣工は1958年8月である。これに先立ち、1950年に法政大学総長に就任した大内兵衛の戦後復興の命を受けて、建築家・大江宏としての戦後デビュー作ともなるその最初の校舎「法政大学大学院（53年館）」の設計を1951年12月には完了し、1953年2月竣工をみる。引き続き、「55年館」の設計を1953年7月に終え、1955年1月にはその竣工を迎えることとなる³⁾。当時、すでにスタッフであった渋谷栄一氏の証言にもあるように、「55年館」の竣工後のある日、「58年館の設計変更」を命じられたという⁴⁾。

ということは、本稿において主題とする「58年館の設計変更」は、1955年1月から1956年11月のおよそ2年の間、それも後述するとおり、規模的にもさることながら、意匠上、構造上、施工上の様

* 法政大学工学部建築学科 助手・博士(工学)

Academic Assistant, Dept. of Architecture, Faculty of Eng., Hosei Univ., Dr. Eng.

々な試みがなされたことを考えるならば、その早い時期になされていなければならない。

すでに拙稿において明らかにされたとおり、建築家・大江宏としての戦後デビュー作でもあった「法政大学大学院（53年館）」は、一見してル・コルビュジェの作品「スイス学生会館」を彷彿とさせるものではあるが、それはまさしく近代（主義）建築として建てられたと同時に、実存の人・大江宏における「近代」の意味を想起させるに十分な出来事であった。この時点での、一人の人格の内部における「建築家」であることと「実存の人」との間の“ずれ”、あるいは“パラドキシカルな関係”こそ、最大限に着目されなければならない⁵⁾。したがって、この「法政大学大学院（53年館）」の設計の完了すなわち1952年1月以降は、工事と並行して、上述の“建築家と実存の人の間のずれ”、“パラドキシカルな関係”の自覚、自知にエネルギーが注がれたことは疑うべくもない。ただし、事態の深刻性への自覚は十分であったとは言えないが故に、かえって十分な時間が費やされたであろう。

この問題への回答を得る前に、『国際建築』誌1953年12月号に発表された堀口捨己設計の「サンパウロ日本館」の監理のために離日（1954年3月～北南米旅行、3ヶ月間のサンパウロ滞在、北南欧を経て9月帰国）、翌年1955年は、ほぼ1年に亘り、この作品をめぐる池辺陽と神代雄一郎・木村徳国の間で論争が繰り広げられることとなるが、文献上は、大江宏の態度は非決定的であった⁶⁾。

以上の状況からして、渋谷栄一氏の証言する「58年館の設計変更」（1955年1月以降まもなく）は、「法政大学大学院（53年館）」の設計完了（1951年12月、竣工53年2月）、「サンパウロ日本館」（竣工54年9月）以降の時間の経過の上で、かつ上記の論争の経過をも見据えながらの、決断であったことはいうまでもない。

1-3. 本稿の構成

本稿において対象とする時期の確定について記してきたが、ここでの主題は、「58年館の設計変更」の何をもって建築家・大江宏における“内面的な事態”として同定しうるかということである。

別言すれば、この「58年館の設計変更」以前の建築家・大江宏は、狭義の意味においてあまりにも建築家であった。端的に言えば、いまだ技術主義的・機能主義的建築観の支配の下にあったし、1952年の段階で発表されたその全体計画からしても幾何学的な空間構成に依存していたといっても過言ではない。さらに付言すれば、一人の大学人として、建築家以前ともいべき実存の人・大江宏によって受信されて然るべき大学の建築を導く理念への開眼、大学とは何かとの問いかけは十全には果たされてはいなかった。

本稿は、「大学の発生はそもそもその成立の母体としての都市共同体を考えなければ理解し得ないし、都市共同体はまた商人ギルド及びその原形たる遍歴商人団なしには成立し得ない」との歴史認識に立ち、「大学は学生と教授が関係ある人々をも含め、同胞意識によって結ばれる community（共同体）を形成し、その団結的な結束によって自治権を有する法人格—corporation（自治体）—を確立してゆくところに成立するのである」⁷⁾との結論を得るに至る「58年館の設計変更」の意味について、大学人としての自覚、自知の問題として考究する。

2. 「法政大学」の紹介と説明

2-1. 『ロンドン・タイムス』紙の紹介記事

法政大学の学内誌『法政』1959年12月号は、「ロンドン・タイムス」が本学校舎を紹介」とのページを設け、留学中の教授から送られてきた『ロンドン・タイムス』紙1959年8月14日付記事の日本語訳を掲載している⁸⁾。大見出しは、「日本の大学建築に代表される現代的傾向」と題し、中見出しには「国際建築様式に於ける地方的特性」とある。

冒頭、「世界の各地に近代建築が進展するにつれてここに全く正反対の二つの方向が看取される。その一つは民族主義的な方向であり、他の一つは更に完全なる国際主義的な方向である。（中略）しかるに極めて最近に至って地方的相違が復活しようとする傾向が明らかに現れてきた。とは云っても現代建築の基本はその国際性にあるということが前述の理由（共通の技法、同一の生産過程、同じような外観—崔引用注）によってその恒久的性格と見做さるべきである以上、この傾向は国際主義に対する反動としてではなく、むしろ現代建築が漸次成熟することによって許容されるに至った、共通な主題に対する微妙なヴァリエーション形式として見られるべき性質のものである」、それは、「民族主義的と呼ぶよりはむしろ地方主義的と表現する方がより適当であろう」、「但しこの場合過去の明らかな模倣を伴うものでないことはここで特に強調しておかねばならない」とある。

後段、「顕著な例」との小見出しの下に、「その中で最も秀れたものは世界の他の如何なるものにも劣らず興味深い。地方的伝統をまざまざと繁栄しているものこそまさにかかる建築であり、大江宏の手による法政大学の新建築はその好例である」、「しかし就中、大江の仕事が最も興味深く、又近代的手法の駆使に最も老練さを示している。と同時にそれは最も日本的である」としている。

その理由として、「法政に於ける新建築の如何なる要素がこの地方的性格を示しているかを的確に明示することは決して易いことではない。それは壁から突出した梁の扱いにあるのかも知れない。あたかも木材のように扱われた柱と梁の鉄筋コンクリート構法の故かも知れないし、或は写真が示す、突出した弓型の屋根と方形の垂直格子の組合せが与えるのかも知れない。或はまた単純には捕捉し難い或る種のプロポーションによるのかも知れない」と語っている。「……かも知れない」、との表現による大江宏の作風に対する指摘は正鵠を得ていると言わざるをえない。その上で同記事は、最後にこのように記すことを忘れてはいない。

「コンクリートのような極めて国際的な材料が使われながら、西欧人の眼には法政大学のこれらの建物が紛れもなく迫力ある日本の性格として映ずるのに、昨年の終りこれが完成した時、日本国内では異国風であり国際主義的であると云う不満を浴びたことをここに記すことは興味深い」

との、それ自体興味深い記事をしたためている。

この記事の筆者の眼の確かさは、民族主義対国際主義というもすればイデオロギッシュに扱われやすい状況を、作品鑑賞における自己の経験に基づいて冷静かつ正確に記述するところにも現れている。別言すれば、大江宏によって実現された「法政大学」は、対立せしめるか、あるいは安易に調停するという皮相なレベルではなく、美意識の深い次元において獲得されたところの“両義的”な、ある

いは“パラドキシカル”な空間表現の境地を切り開いていたといえるのではないだろうか⁹⁾。

ここでは、建築家・大江宏の腕の確かさを指摘するとともに、そのような空間表現を可能とする実存の人・大江宏の美意識の存在を指摘するまでに留めておきたい。

2-2. 建築家・大江宏の主旨説明

ところで、この『ロンドン・タイムス』紙に紹介記事が掲載されたこの年は、法政大学校舎の設計により、「学校建築の新生面」を開いたとして、1958年度文部大臣芸術選奨を受賞する。それを機に大江は、「法政の環境と建築—学校建築の新生面とは—」と題する一文を書いている¹⁰⁾。

「時代がうつり、街が開け、交通が進んでも地形や地位に基づくロケーションの本質的な価値というものは易くは変らない。戦後の校舎復興にあたって、法政は以前から木月に広大な土地を持ちながら、又一方富士見町の土地が大学のキャンパスとしては過小であり、その拡張には並々ならぬ困難が重々予想された上で、なお且つこの土地を法政大学再建の地と決断された大内前総長の考慮は、専らこの位置がもつロケーションの優位におかれた故であろう」。

「現代の大学にとって、環境の条件と共に公共施設としての都市計画上のロケーションは益々重要なものになりつつある。・・・現代の大学の機能が実社会の活動と絶縁、或いは疎遠となつては一日として成り立ち得ないということに関連して、富士見町は大学にとって又と得難い環境である」。

「過大学生数の影響を最小限度に食い止めようとする、建築的に可能な限りの追及であった。法政大学の校舎は、「適切な構法と、自由な表現によって、学校建築に新生面を開いた」という理由によって、芸術選奨の対象となったけれども、実はその過酷な現実によってぎりぎりに追いつめられた厳しい枠の中で最後にゆきついた姿なのである」。

「元来「ユニヴァシティー」とは、学問の自由と独立を願う人々の一つの集団を意味した」のであり、それを入れる容器としての大学建築もかくあるべきであるとする。別言すれば、「大学建築は未だ現代の形を獲得していない」。

「現代はユニヴァシティーが再び本来の性格を取り戻して、学問の自由と独立を齎しく目指す人々のコミュニティであり、同時にこれが社会を動かす一つの原動力である以上、その容器である学校建築は、ほんとうの意味でのアカデミックな形に立ち返って、その内容に最も相応しい姿をとるべき時である。「学校建築の新生面」とは、正しくそのことを指すのでなければならない筈である」と記している。

法政大学の立地について、ロケーションの意義は、とりわけ現代社会における大学の位置を考えると、都市との関係の不可分であるところにある。必然的に建物の高層化を要求されることとなるであろうが、建築家として、そのような条件を踏まえて大学建築としてのモニュメンタリティを実現しうるかにある。

2-3. “モニュメンタリティ”について

ところで、1954年9月に「サンパウロ日本館」（設計：堀口捨己、監理：大江宏）の仕事を終えて帰国した大江宏は¹¹⁾、折しも「ニ

ューヨーク近代美術館内日本館」の工事監督を終えた吉村順三とともに堀口捨己が司会をする座談会に出席する¹²⁾。

話題が「ローマの停車場」にかかわりつつ、“モニュメント”に触れる箇所での大江の発言を追いかけてみると、以下のようである。

吉村 ヨーロッパの伝統—手工芸的技術のよさ、ということ。しかしうらやましいのは、その質のよさを持ちつつけていることです。

堀口 大きなモニュメントを作るローマ的な伝統と無関係ではありませんね。あれだけの大きさの構造を近代的表現でやってのけた姿は、まさに近代的モニュメント：・・・。

吉村 モニュメントですね。

大江 私はイタリアにいいものはないと思いましたが、イタリアの中で一番いいものはローマの停車場だと思いました。しかし、近代のモニュメントの性格ではなくて—やっぱりサン・ピエトロだとかブラマンテのものとか、そういうものと競争しようという・・・かつてのモニュメントに無意識にひきずられていったという感じをうけました。イタリアにはよくある例ですが・・・。

吉村 それはあくまでヨーロッパ的なんです。僕はヨーロッパの建築で価値のあるものは古い建築だと思いました。ロマネスク、ゴシック、ルネッサンス・・・皆すばらしいと思いました。近代はまだあれだけの質を仕上げておりません。そこにわれわれの希望もあると思います。ローマの駅には、大江さんのいったようなところがあると思います。

大江 僕は、たしかにサン・ピエトロは偉大だと思うんです。モニュメンタリティな方向では誰もまねができないとは思いますが、すけれども、しかし僕は感心できないんです。ルネッサンス的なモニュメントは、大きくのさばって人を威圧しよう・・・そういう手ですね。その手に対して僕は「アッ」と思うんですが、すぐ反感がムラムラと起ってくる。

堀口 僕らにはちょっとわかりにくいかもしれませんが・・・。古ローマの半分こわれたアーチを見ると驚くんですが、それは純粋の建築の驚きだと思うんです。ものをつくっているものの驚きと喜びにつながる・・・。

「サンパウロ日本館」においてのテーマの一つは、究極のところ“ナショナリティ”の問題を建築家としてどのように考えるかにあったが、監理を終えて帰国した今、建築家・大江宏にとってのテーマの一つとしての“モニュメンタリティ”の問題は“ナショナリティ”のそれと共に、「法政大学58年館」を実現していく過程での実存の人・大江宏における最大関心事の一つであったのである¹³⁾。

先述の『ロンドン・タイムス』紙の紹介記事に従えば、“ナショナリティ”の問題は、こと表現あるいは印象の場面としては、「西欧人の眼には紛れもなく迫力ある日本的性格として映ずる」とともに、「日本国内では異国風であり国際主義的である」との「不満」を浴びたというその「不満」への回答こそ、建築家・大江宏をして可能とした、実存の人・大江宏の歴史認識にして現実感覚ではなかっただろうか。

後年の全作品を貫くこのような特徴からして、「法政大学58年館」をしてそのような回答を得たのであれば、それ自体は建築家・

大江宏においても、かつ実存の人・大江宏にとってもまったく不服とするには当たらない評価であったといっても過言ではない。

それでは大江宏は何を“モニュメンタリティ”の内容として考えていたのだろうか。

3. 「法政大学」の評価と設計の主題

3-1. 大江宏による「設計要旨」（1958年11月）

1958年11月、竣工を記念しての『パンフレット』には、1950年6月の就任以来、市ヶ谷校舎の復興計画を強力に推進してきた大内兵衛総長の「ごあいさつ」と、大江宏の「法政大学設計要旨」の2編が収録されている¹⁴⁾。

この中で、“モニュメンタリティ”の内容は“コミュニティ”であることを大江宏は告げている。以下、長文の引用とはなるが、論点の重要性に鑑み全文を紹介する。

「1952年のはじめ、法政大学が本格的な校舎の再建に着手して以来7年、今度58年館の完成によってその計画の第1段階が終了しました。この計画は、53年館、55年館、58年館の3期に分けて次々に実施されたのですが、夫々の基本設計は、最初に立てられた全体計画の線に乗って進められました。

先づ出発点が建築の機能性と合理性を最高度に尊重しようとするところにおかれたために、所謂「学校らしさ」と云うような旧来の観念は、これを一応乗り越えたところから設計が始められました。しかし乍ら一方、「学校建築」は今なお一つのモニュメントでありたいとする人間の欲求は昔と少しも変わらない願いです。ところが近代建築は本来建築が強く持っていたところのモニュメンタルな性格を今大方は失ってしまったようです。それは唯単に能率的で衛生的なだけでは、それが如何に高度に充足されていたとしても精巧な機械であり得ても、人間のためのモニュメントとはなり得ないと云うことです。高度に機能的であると同時に、建築から失われたモニュメンタリティーを再び積極的にとり戻したいと願うことがこの大学建築の課題となりました。かつて古代の神殿や墳墓は、神の力、支配者の権力を強大に象徴しましたが、現代の人間にとってその種のモニュメンタリティーは全く意味を持ち得ません。それでは現代の建築が負う可きモニュメンタリティーは一体何に対してかと云うことです。

現代の大学は、その発生期に於ける「ゼミナール」とは全く別物であり、又もはやそれはかつての「象牙の塔」でもありません。現代の大学は現実の社会を現実に変動して行く社会の原動力です。この大きな力の源泉は一個の論文・個人の研究に発するのではなく、学生も、先生も、すべての人々を含めて大学と云う一つのコミュニティを構成する人間の集団そのものの中にあると考えられます。大学は正しい智えを追求しようとする一つの目標に対して育しく統一された人間集団を容れるコミュニティ・コアです。現代の建築が負う可きモニュメンタリティーは、このようなコミュニティの持つ迫力が自ら発する強烈なイメージによって、現実の造型にまで高められます」。

3-2. 浜口隆一・神代雄一郎による解説（1960年）

それでは“コミュニティ”とは如何なるものとして建築家・大

江宏は考えていたのであろうか。

1960年8月に出版された『世界建築全集 第12巻 現代3 文化と厚生』¹⁵⁾ 所収の「法政大学」についての解説は、その建築的特質を的確に記している。

「現代建築のなかで、学校が占める比重はかなり重い。それは学校というものが、若い世代をうけとめて、その肉体と精神の陶冶、人間形成をする場であるという、たんに容器や施設としての建物以上のものであり、人間的意義が濃いからであろう。建築の構造、平面、そして造形視覚的效果などが一体になって、どれだけの働きをすることができるか、建築家たちにとっては、まことにむずかしい。しかしやりがいのある課題である」との前言に続いて「法政大学」について個別に解説している。

「戦後あたらしく建った総合大学（university）の校舎として、もっともすぐれたものとされている。計画から完成まで10年近くにわたり、完成した1959年には、設計者・大江宏（1913- ）¹⁶⁾ は日本建築学会作品賞をうけた。

法政大学校舎が建築としてすぐれているのは、総合的な立場から、全体がまとまって設計されていることである。このことは総合大学の学園（university campus）としてあたりまえのことなのだが、日本の戦後に建ったものには実に珍しいのである。それだけに法政大学の設計が、大学建築の伝統を正しくふんでおこなわれたことについては、建築家の努力もさることながら、法政大学の当局者・大内兵衛総長以下の理事たちの洞察ある処置にたいして深い敬意をあらわしたい」との評価を与えている。

「伝統的に大学校舎は中層程度のものが常識で、これが幾棟か適当な距離をへだててならぶことになる。法政大学では、この定石をやぶって7階建ての高層建築にし、建物を大きくまとめた。近代技術が発達した今日、エレベーターつきの高層校舎が現れるということは、大学といえども必然の流れかもしれない。法政は、日本で、その第一歩をふみきったわけである。結果的には、成功だったようで、都心に建つ大学の新しいタイプを創りだすことになった」との全体像を紹介している。

その上で大江宏の強調するところの“コミュニティ”の建築的具体化として、以下のように記している。

「法政大学の内部のプランは、総合的によく練られている。大規模な組織だけに、かなり複雑であるが、わかりやすい空間構成になっている。設計者としては、教室・講義室・研究室等々の必要な諸室のほか、学生たちのために、なにか精神的な“つどい”の空間、コミュニティ・スペースといったものを積極的に創りだそうと努力した。それが学生ホールを中心として、本館の中央部を直角に貫通する帯状のスペース群である。入口のピロティをとおって、学生ホール、階上にあがって集会室、地下にさがって食堂・売店など、学生のための施設が連なり、同時に造形的・視覚的に入念なデザインによって、なにか新しい大学生活の息吹をうたいあげるような空間効果が生まれている。このあたりに多勢の学生たちが三々五々とたむろしているところは、心温まる眺めである。たしかに戦後の大学建築の代表作とされるに値しよう」と論じている。

「とにかく、この法政大学によって、大江宏は建築界に花々しくデビューし、国際的にもその名を知られるようになった。さらにひきつづいて大江はいくつかの学校のデザインを手がけ、その方面で

のナンバー・ワンと目されている」との評価を与えている。

3-3. 大江宏による解説(1958年12月)

浜口隆一・神代雄一郎という建築評論家によってこのような全体的な評価と、とりわけ高い意義を与えられたその根拠としての建築的具体化の指摘について、すでに大江宏は発表の時点で、このように記している。

「法政大学本館中央部の地階・1階・2階を、4スパン・24m幅で北から南へ貫通する帯状のスペースは、コミュニティのための地帯である」と説明されている。そして「この地帯が法政大学全体計画の建築的な核をなす。更にこの地帯の中心をなすのが学生ホールであり、学生のコミュニティの核である」と明確に性格づけ、「このスペースは1階中央部を占め、南にのびて南庭に連り、前面は北にのびてピロティとなっている」との位置付けを行っている。

もう少し大江の説明に従うと、しかもこの「学生ホールの中央部は2階高の吹抜けとなり、南部の中2階は集会室、中央部の下は食堂である。ピロティの下は書籍・文具・服・靴・食品・写真材料・調髪・交通公社等が集って小商店街となっている」とまで記している¹⁶⁾。

建築家・大江宏による建築的具体化とは、狭義の空間構成上の問題に尽きるものではなく、実存の人・大江宏によって体験せられている、そこ、その場所、その空間での生き生きとした生活の現実が把握されていることにある。大江宏の作品に対して、純粋芸術的完成度を求める人々からはある種の不満がしばしば語られてきたが、その大きな理由もここにあると言われなければならない。

「法政大学58年館」を竣工した当時の大江宏によれば、その建築認識とは次のようなものである。

「本来、学校の建築とは生徒の生活を規制すべきものではなく、逆に無限の可能性をさぐるべき資質を備える苦いものである。モダンアートやグット・デザインのプリンスは、商業主義の手段とはなり得ても、おそらくは人間と共に生きて、そこに無限の可能性を開くような永遠の恩恵を期待することは無理のようである。デザインはいくら突詰めても、見た目の美しさ以上を出ることはできそうもない、また余りにも造形的に緊迫し、徹しすぎた空間や形象には時として人間をおびやかす、人間の生活を遍塞せしめるのではないかと危惧さえ感じられる。いわば写真面にはどうしてもでてこないような要素こそ、建築が基本的に備えなければならぬ最も貴重な資質であろう。建築が、撮られた写真の上でその優劣が云々されることが多くなったことにはそれ相当の理由が存すること乍ら、逆に写真面がよくなるような形、写真的効果を最大限に盛り上げ得るような空間を、無意識のうちにでも設計の中に追うことになると、そこで建築と人間の生活は無縁のものになろうとする」と警告を発している。すなわち、

「いいかえれば、デザイン以前、造形以前の問題が建築のいのちであり、これは人人が膚に感じ、空気として感ずるような要素で、これこそ人間の生活と共に育って行ける建築の資質である。このことはほかの種類の建築についても同じようにいえること乍ら、特に学校建築の場合には学生の生活と、建築との間に成り立つ統一を支配する最も重要な要素であり、この統一を得てはじめてその建築はほんとうに完成したといえるのである」。それは、「現在の学校が、

コミュニティのための場所を全く欠いているということが、学生を、校内に落ちつかせない大きな理由の一つである」として、「学生が学校に落ち付けないということ、従って講義にでるのは専ら卒業の資格を得るための単なる手段と化していくとき、その講義がすめば一刻も早く学校を逃れたいという気持ちと、学内で満たされなかったコミュニティをどこかに求めたいという生活本能」にこのコミュニティ・ゾーンは応えようとするものであった。

4. 「58年館の設計変更」

4-1. 大江宏による後年の回想(1984年)

1984年、法政大学の定年退任のこの年に刊行された作品集において、大江宏自身はこのように回想している¹⁷⁾。

「コミュニティホールと食堂で構成される学生ホールは南禅寺の伽藍を、いわばインターナショナルの定義からいえば異質のものを心中密かなモチーフとしています。つまり、南禅寺の座禅堂はコミュニティの場ではないかというのが発想の元にあって、真ん中で傘状にジョイントされたHPシェルによる吹き抜けの空間構成、天井の照明などがその表れです」との重要な発言をしている。

重要な発言という意味は、管見によれば、これ以外の箇所でのこのような発言はなされていないこと、建築家・大江宏のデザインの建築的・思想的源泉が明かたされたこと、しかもすでにこの時点で一般化していた所謂「インターナショナルの定義からいえば、異質のものを心中密かなモチーフとし」ていたことが率直に吐露されたからである。さらに、大江宏によるこの回想に至るまで、幾つかの「法政大学」に関する批評がなされ、その都度、この学生ホールを核とするコミュニティ・ゾーンの存在が指摘されてはきたが、それが南禅寺の座禅堂をコミュニティの場と解釈し、発想の元としていることは指摘されたことはなかったからである。

初めて上述のような発想の元が明らかにされてみると、建築設計における建築史的な体験・知識・教養の幅と深さであり、造形的・視覚的問題を内容的・生活的問題と2分することなく、人間の行為における全体性のままに“建築的”なる空間構成(空間・構成)へともたらずこと、そのような建築史上の事実を現代のこととして造形的・視覚的にはもちろんのこと、内容的・原理的に、かつ創造的に解釈・再現しうる建築論的思惟の力量こそが、実存の人としてのリアリティに支えられて、建築家の発想を決定づけるであろうことは明らかである。

建築家・大江宏を知る者は、大江が常々語り続けてきた建築教育の核心を占めるべきは計画学や構造学ではなく、歴史意匠であるとの主張の実践を想起するのではないだろうか¹⁸⁾。

それでは、法政大学の全体計画の核となったこのコミュニティ・ゾーンはどのような経過の下で生成したのだろうか。

「5年の間に私自身の中に心理的变化が起ってきます。それは、1954年の北および南アメリカ、ヨーロッパ旅行以降、私の中に内在していたいろいろな疑問が表面化してきて、それを解明するプロセスの中で葛藤があったからです。全体計画は旅行前に完成していましたから、外観はインターナショナル・スタイルを踏襲した形、つまりカーテンウォールを用いて明るく軽快なデザインで統一していますが、私の内的変化を密かに表しているのが学生ホールの内部と、飛石を配したその前庭です」と記している¹⁹⁾。

「法政大学58年館」を掲載した建築ジャーナリズム各誌は、グラビア写真を通じて、いずれも「学生ホールの内部と飛石を配したその前庭」を主題的に扱っている²⁰⁾。このことからしても建築家・大江宏が、一人の大学人として、「法政大学」において何に最もエネルギーを投じていたかを知ることができる。

1952年から1958年に至る、一連の「法政大学」の校舎の竣工から25年を経たの上述の大江宏自身による回想は、「55年館」の竣工後、「58年館」の設計にあたって大きな「設計変更」がなされたことを証言している²¹⁾。

4-2. 「設計変更」の時間帯

この「設計変更」についての顕著な建築上の特徴についてはもちろんのこと、上述の大江宏の発言にある「5年の間に私自身の中に心理的な変化」であり、「私の中に内在していたいろいろな疑問」であり、「それを解明するプロセスの中で葛藤があった」ことである。

本稿の冒頭において記したとおり、この「設計変更」がスタッフを通じて具体化されたのは、「55年館」の竣工した1955年1月以降、「58年館」が着工する1956年11月の間の早い時期であったが、それでは、その「設計変更」が「構想」され、密かに大江宏自身のうちで「スケッチ」が描かれたのはいつだろうか。

ところで、「55年館」の設計が完了したのは1953年7月であり、8月の盆明けには着工している。そしてその竣工は1955年1月である。この期間すなわち「55年館」の“工事期間”に「58年館」のための「設計変更」が「構想」され「スケッチ」が描かれたこととなろう。大江宏自身は“5年の間の心理的な変化”と表現しているものの、むしろこの期間に、ある特殊な“限界状況”下で集約的・集中的に為されたというべきではないだろうか。

すなわち「55年館」の“工事期間”はそのまま生涯の師と呼ぶ堀口捨己設計の「サンパウロ日本館」と係わることとなる。堀口捨己が、浜口隆一や大江宏の励ましを得て設計を受諾し、ついにその計画案「さんぼうろ・いびらふえら公園の日本館設計について」を『国際建築』誌1953年12月号に発表、翌1954年3月、大江宏は現場での監理の命を受けて離日する。同年9月帰日、早々に堀口捨己を司会役とする吉村順三を交えての鼎談に臨み、ついで翌年の『新建築』誌1955年2月号に結果を発表する。「サンパウロ日本館」に係わる一連のこの期間、計画案の発表・離日（北南米旅行）-サンパウロ市での現場監理-（北南米旅行）帰日-作品発表は、奇しくも、「法政大学55年館」の“工事期間”に重なっているのである。そしてこの“工事期間”とは、また同時に、「58年館の設計変更」へと至る「構想」と「スケッチ」のための時間帯でもあった。

5. 結

それではこの「設計変更」によって何が行われたのであろうか。それは、本稿の冒頭に記述した『ロンドン・タイムス』紙の「法政大学の紹介記事」に見られるとおり、表現において、近代主義的対民族主義的という図式を越えて、国際主義的とも地方主義的ともいいうる第2次世界大戦後の日本における両義的世界を獲得しえたこと、そして1954年の海外出張・旅行以来の課題であったモニュメンタリティの内容としての大学というコミュニティを発見しえたこと

にあるのではないだろうか。

両義的世界といい、コミュニティといい、それは大江宏のいう「デザイン以前、造形以前の問題」であり、であればこそ「建築のいのち」といわれるべきものである。狭義の建築的な計画、技術、空間構成、表現手法などのすべてはかくして全的に投入されたのである²²⁾。

建築家・大江宏の自己形成は、「法政大学58年館」の「設計変更」をめぐる、実存の人・大江宏によって「デザイン以前、造形以前の問題」に触れること、「建築のいのち」を自覚し、自知するところから始められたのであった²³⁾。

注

1) 崔康勲：様式創造への建築論的思惟に関する研究-近代東アジアと日本を根拠として-、東京大学博士論文、私家版、1994.7

この論文においては、副題が示すとおり、建築論的思惟一般についてではなく、かつ近代東アジアと日本における建築論についてではなく、特殊・具体的な全般的状況を建築をめぐるアポリアとして客観的かつ主観的に把握し、そのアポリアに踏み留まりつつ、建築家の建築的行為を理論的に反省し、様式創造を志す思索の枠組を付与すること・解明することが目論まれた。鍵語の一つは「建築家の実存」である。歴史-内-存在としての建築家の社会性・対他性に着目するとき、建築家以前の一人の個人としての即自性を消滅しうるのである。むしろ、その個人がすでに社会性・対他性によって構成された存在であることを否定するものではないが、この2者を狭義の「建築家」と「実存の人」と表記する。両者は相互に反照的關係にあり、無限の問答的力動のもとにあって、そのつど、「建築家の実存」としての対自的自己を獲得しつつ、建築的行為をつづけて、そのような内面的事態そのものを脱構築していく。

2) 大江宏：大学の成立と発展-大学の計画を導く理念の探究-、東京大学博士論文、私家版、1961.3. p3

3) 大江宏：大江宏一わが軌跡を語る、別冊新建築・日本現代建築家シリーズ 第8巻 大江宏、p197、1984.6

4) 渋谷栄一：なによりも自由を大切にしたい人、95建築文化講演会集、新日本建築家協会、p12、1995.11

5) 崔康勲：「法政大学大学院」における「近代」の意味-建築家・大江宏の言説に関する方法論的研究 その1-、日本建築学会計画系論文第525号、pp307-312、1999.11

6) この問題については別稿を予定している。

7) 大江宏：注2)

8) 学内誌：法政、法政大学、pp38-39、1959.12

9) この記事の指摘はきわめて今日の視点であり、この問題への直接的かつ精緻な説明は建築家・大江宏によってもなされていないことからしても重要である。記者は、「法政大学」に象徴される戦後史的状況を国際主義と地方主義として捉えており、近代主義対民族主義という対立図式からは免れている。あるいは近代主義を衝撃として生成したものを戦後史的状況としている。ここでは2編の大江宏論、神代雄一郎：や、花の香の聞こえ、磯崎新：技芸の伝承、を上げておく（いずれも大江宏他：大江宏=歴史意匠論、南洋堂、1984.10 所収）が、師・堀口捨己との“対決・対話”をとおして、大江宏がいずれを選択しようとしていたか、さらなる“調停・折衷”を果たそうとしていたかについては、別稿を予定している。既発表関連論文としては崔康勲：注5)を参照。

60年代以降については、崔康勲：ヘテロトピアへの航海術-建築家・大江宏の思考回路-、日本建築学会大会（中国）建築歴史意匠部門研究協議会：資料、pp23-30、pp75-81、1999.9を参照。

10) 大江宏：法政の環境と建築-学校建築の新生面とは-、学内誌：法政、法政大学、pp34-35、1959.5

11) この問題については別稿、「サンパウロ日本館」における「堀口捨己の意味」、日本建築学会計画系論文第539号、pp283-288、2001.1

12) 堀口捨己、大江宏、吉村順三：（鼎談）欧米の近代建築と各国の伝統、国際建築、p16、1954.9

13) 注11)を参照。

14) 大内兵衛：こあいさつ、大江宏：法政大学設計要旨、竣工パンフレット、法政大学、1958.11

15) 浜口隆一、神代雄一郎：学校・法政大学、世界建築全集 第12巻 現代3 文化と厚生、平凡社、pp3-6、1960.8

16) 大江宏：法政大学の設計について、建築文化、p16、1958.12

17) 大江宏：注3) p83

18) 大江宏：歴史意匠の再構築（聞き手：宮内嘉久）、大江宏=歴史意匠論、南洋堂、pp195-204、1984.10。この問題については別稿を予定。

19) 大江宏：注17)

20) 国際建築 1958.11、新建築 1958.12、建築文化 1958.12

21) 渋谷栄一：注4)。松隈洋：法政大学（1953-1958）モダニズム・ジャパン研究会編、再読/日本のモダンアーキテクチャー、彰国社、p57、1997.7を参照。「設計変更」への私見は、別稿を予定している。

22) 両義的世界、ロケーション、モニュメンタリティ、コミュニティといった意味的世界は、ピロティ・学生ホール・前庭という空間構成をもってする狭義の建築的行為を通じて、建築的（場所的、空間的）に具体化されたが、このことは一転して建築術の実践の問題として建築論的にも究明されなければならない。この問題については別稿を予定している。

23) 田中喬：建築一術 初歩-虚白の場から、建築的場所論の研究、中央公論美術出版、pp75-95、1998.1の教示するところに従って、この「設計変更」を「デザイン以前、造形以前の問題」、「建築のいのち」の開眼として把握することは、一大学人としてのその後の建築家・大江宏が問題としたことを問題とする上で示唆的である。

(2000年8月21日原稿受理、2001年3月7日採用決定)